

# 昭和38年度平城宮発掘調査概報

歴 史 研 究 室  
建 造 物 研 究 室

昭和38年度におこなつた特別史跡「平城宮跡」の発掘調査は、第12

・13・14・15・16次の5回にわたり、発掘総面積は211アールによよ

んだ。第12次調査は、7月9日から9月26日まで、発掘調査事務所の

西面方、第一次内裏中心部(6AAQ-C・D地区)にあたる20アール

を発掘した。第13次調査は、8月2日から10月9日まで、通称「一条通

北側佐紀町南部(6AAO-F・H・I・K・V地区、6AAO-C・D地

区および6AAB-U地区)の50アールを発掘した。第14次調査は、宮

城南西隅(6ADH-F・I・J・K・L地区)55アールを12月7日から

3月31日まで、第15次調査は、西面南門の周辺(6ADF-T・R・P

地区)46アールを2月21日から3月31日まで発掘調査した。以下、調

査結果の概要を報告する。

## 第12次調査

調査地域は、これまで3回にわたり調査した第二次内裏内郭の中央  
廊部を占めている。おもな遺構は第2次内裏の建物と廊である。掘立  
柱回廊SC247は、11間分が検出され、既調査部分と合わせて、内側  
22間の全貌が明らかになつた。回廊の約2.7m南には南面築地回廊の北  
雨落溝が東西に通つていて、廊の東西には柱心から約2.1mに幅約40  
cmの素掘の雨落溝がある。この廊の西5.9mで、9間2間(柱間2.95m

等間)の南北棟掘立柱建  
物SB650を発見した。

この建物は第6次調査  
で発見したSB440と  
8.85mをおいて平行柱

列をそろえて南北に並  
んでいる。南面築地回  
廊の北雨落溝は内裏中  
軸線から東へ約43m発

掘したが、残存状況は  
極めて悪く、SC247  
の接合部付近に溝石が  
残存する程度であつ  
た。しかし、凝灰岩の  
散乱する雨落溝の痕跡  
は中軸線付近でも一直  
線に通つており、内裏

南面築地回廊の基壇は



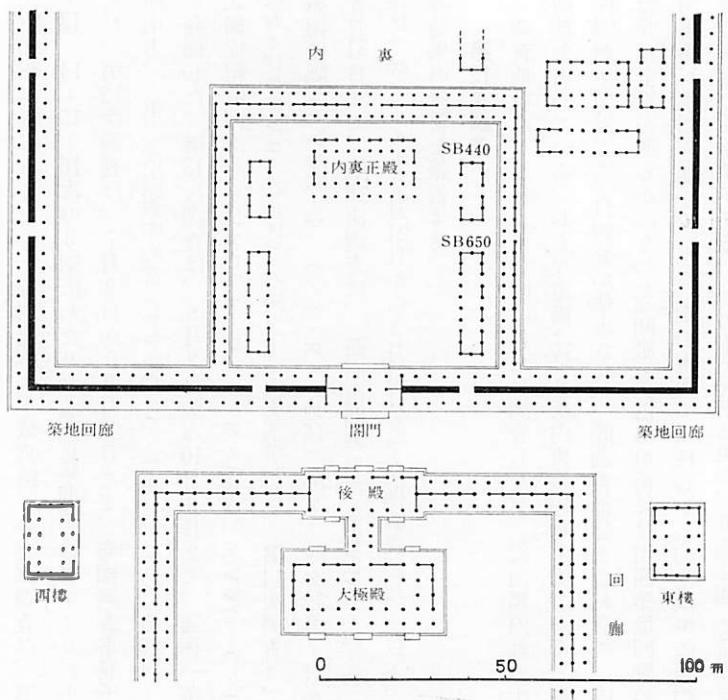
第1図 第6・9・12次調査区域

2次内裏以外の遺構として柵が2列ある。

### 第13次調査

第13次調査は、東地区(6AA0-F・H・I・K・V)と西地区(6AA0-C・D)も西地区(6AA0-F・H・I・K・V)はおじでねりだつた。

#### △東地区△



第2図 内裏大極殿一郭復原図

主な遺構は、建物11棟、築地1面、井戸1個所、溝2条、土壙2個所である。建物のほとんどは掘立柱のものであるが、SB875の小建物は小礎石をえたものである。6AA0-U地区一帯は地盤が東に傾斜して下り、それを埋めて造営が行なわれていた。遺構は配置状況や柱穴の重複関係から少くとも次の5期に区分しうる。

#### A期 6AAB-U地区中央北辺で、東西櫛桁行7間(柱間3m)建物SB795の一部を検出したのみである。

**B期** 建物3棟、築地1面が整然と配置されている。U地区の東北部に、南北棟6間以上×4間(柱間各3m)東西画廊付建物SB730がある。この建物の東側柱列の南延長線上に東妻をねじて、東西櫛桁行7間(柱間2.6m)の建物SB710(梁間未確認)がある。その約6.5m西に東西棟3間×2間(柱間各2.4m)の建物SB808がある。この南側柱列とSB710の北側柱列とは同一線上にある。U地区東端には築地SC705が南北に通りており、築地の東側は一段低くなっている。築地は整地層を約50cm掘りさげ、その上に黄褐色粘土を積み上げた基礎地固めを残すのみで、東縁は水田造成時に破壊され、甕窓の築地基礎地固めの最大幅は6mである。U地区西北隅の土塙SK820はこの期に属し、出土した木筒から埋没時を天平末年に推定できる。

第二次内裏に属する建物を平安宮内裏と比較すると、SB440・650は寛陽殿、春興殿にあたるものだが、桁行が寛陽殿9間、春興殿が7間であるのに対し、SB440が9間、SB650が9間となつてゐる。第一回門の位置でも張出しあらず、回門の幅は築地回廊の幅と一致している。

第二次内裏に属する建物を平安宮内裏と比較すると、SB440・650は寛陽殿、春興殿にあたるものだが、桁行が寛陽殿9間、春興殿が7間であるのに対し、SB440が9間、SB650が9間となつてゐる。第一

東廻付建物SB818<sup>マ</sup>、その南10mに西側柱列をそろえて、南北棟2間以上×2間（柱間各3m）の建物SB805がある。この建物には床東柱穴がある。6AAO-D地区の北部にある3間×2間（柱間各2.4m）の建物SB875<sup>マ</sup>の期のものであろう。

D期 D地区の中央部西よりに東西棟5間×3間（柱間各2.4m）北廻付建物SB775がある。

E期 D地区の中央北よりに東西棟6間×4間（柱間各2.4m）四面廻付建物SB780がある。井戸SE715<sup>マ</sup>の期に属する。

以上の5期のほかに時期を決しがたい建物が数棟ある。なお、D地区のほか全区域は市庭古墳（SX500）の前方部東側の周濠部分にあたり一緒にトレハチを入れて玉石を敷きつめた外堤東岸を検出した。

#### △西地区▽

今回新たに検出した主な遺構は、建物11棟、柵1列、井戸1個所など、第2次内裏北面築地回廊SC060<sup>マ</sup>や北の築地SC488などの東延長部も前年度にひきつき検出した。この地区的南半は市庭古墳前方部前面の周濠にあたり、平城宮造営時に埋没し、その上に建物を整営している。新たに検出された建物はすべて掘立柱のもので、配置状況や柱穴の重複関係から次の6期に区分した。

a期 F地区とK地区にまたがった南北棟5間×2間（柱間各2.4m）の建物SB1080がある。他に遺構はない。

b期 K地区の中央部にある東西棟5間以上×5間（柱間各3m）の建物SB1000は身舎の梁行が3間のもので、西端は未調査だがおそらく四面廻になるものとみられ、6AAO区で最大の規模のものであ

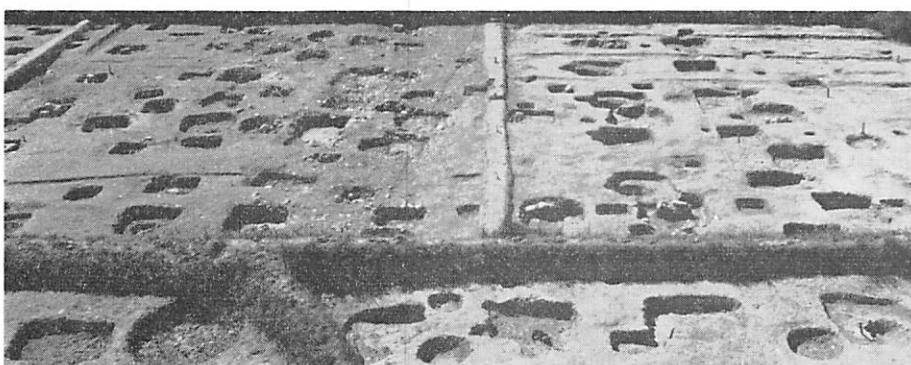
る。その6.5m北にある東西棟5間×4間（柱間桁行各2.1m、梁行各1.5m）南北廻付建物SB1085<sup>マ</sup>の期のものかも知れない。

c期 K地区の東部に南北棟11間×2間（柱間桁行各2.85m、梁行各3m）の建物SB900がある。

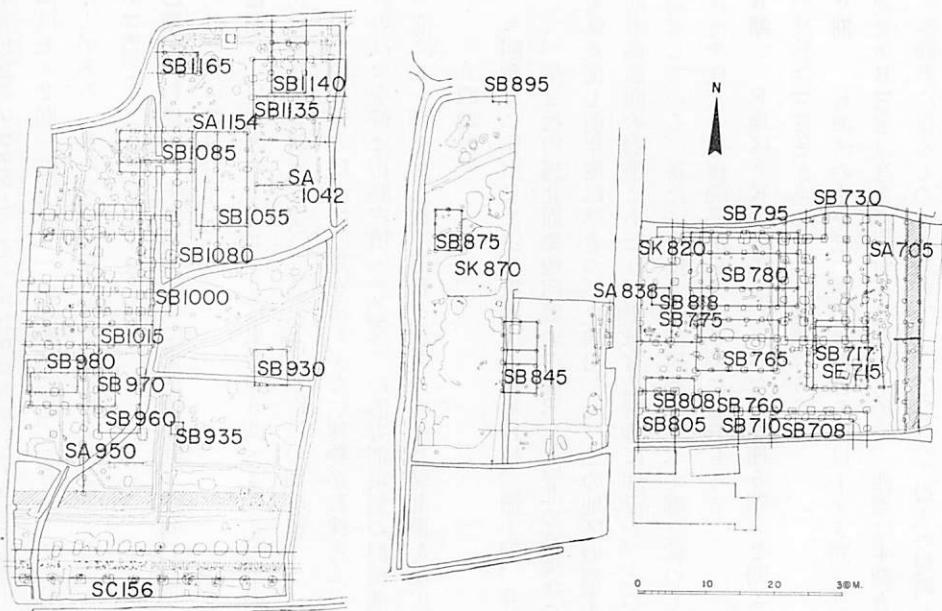
d期 東西棟5間×2間（柱間桁行2.4m、梁行2.7m）建物SB790<sup>マ</sup>の期に属する。

e期 SB1000南半に重なる東西棟6間以上×3間（柱間桁行各3m、梁行各2.85m）南北廻付建物SB1015がある。

f期 F地区のほか中央で、南北棟7間×2間（柱間各2.4m）建物SB1055を検出した。この建物の北第



第3図 SB1000 付近遺構状況



第4図 第13次調査地域実測図

6柱列の中央よりに小柱穴があり、間仕切りがあつたものと思われる。この間仕切りまでの5間の部分には、西に3m離れて小柱穴が並び、西廂、日根窓などの存在も考えられる。このSB1055の北2mに東西棟4間以上×3間（柱間各2.85m）南廂付建物SB1135がある。桁行梁行ともに2間の建物SB930と南北柵SA950よりの期のものであろう。この期の遺構は方位が北で西にふれる傾向がある。

第13次調査地域はいずれも第2次内裏内郭の北に位置し、第10・11次調査地域とともに内裏に付属する部分でおそらく平安宮の華芳坊・桂芳坊の前身的な地区と推定される。東端で検出された築地SC705は現地形からみて、第2次内裏外郭の東面築地とみられる。

発見された遺物で最も著しいものは、東地区のSK820から出土した年代の推定される一括遺物である。この土壙は方約4m、深さ2.3mで、底に厚さ55cmの遺物の堆積があつた。この堆積には本年報で別に述べた1869点の木簡とともに、多量の土器類、木器類、織維製品、瓦類、自然遺物などがあつた。この土壙は、おそらく短期間のごみ捨て穴らしく、埋没の年時は木簡の年号記載から天平19年8月をあまりへだたらないと推定される。土器類は土師器、須恵器が主で、三彩釉小形薬壺蓋が一点ある。土師器、須恵器には墨書のあるものが十数点あり、土馬が一点出土している。木製品には糸巻、紡錘車、火鑽臼、杓子、箸、曲物容器、漆器片や人形、桧扇など、織維製品には平絹断片、麻繩があり、さらには、席や籠の断片、桧皮なども検出されている。自然遺物には栗、胡桃、桃、瓜などの種子類、木の枝や葉があつた。同じく木簡の出土をみたSK870は東西・南北とともに5mほどの

不整形なもので深さは1.3mと浅く、遺物保存状況は良くなかったが、土器・瓦類のほかに漆冠断片、葦片などを検出した。この土壌付近の整地層中から、綠釉平瓦片が一枚分出土している。その他の地点からは、多量の瓦・土器類が出土しているが、U地区検出の数点の円硯、鳥形硯、八花縁宝珠硯類や墨書土器が注意される。

#### 第14次・第15次調査

第14次調査は宮跡西南隅の6ADH区で行なつた。主な遺構は宮城の南を限る大垣のほかに掘立柱建物5棟、柵2列、井戸2個所がある。大垣は、南縁が現在の水路で破壊されて不明だが、幅8.5m以上、深さ1.5mの基礎地固めをおこない、その上に幅約1.5mの基底部の築地と北側に約1.5m幅の犬走り部を設けている。築地は削平されていた。築地の中心から12m南に隙があるが北縁を調査するにとどまつた。



第5図 檜扇

調査地域の西北部で、側板を立て、内側から枠でとめた方形の井戸を検出した。側板は、各面二枚、上下二段、計16枚からなり、すべて木製の楯を転用したものであつた。木製楯は、下段8枚に用いたものが保存良好でほど完形に近く、頂部を山形に作つた長方形の材で、長さ150cm、幅54cm、厚さ3cm、表面中央に鎬がある。表面には、上下に鋸歯文、中央に逆S字形の文様を、黒、丹、白の三色で書いている。上端木口部には、斜めに裏面まで貫通する小孔がほど3cm間隔に穿たれている。中央には上下約20cmをおいて2個ずつ小方孔が穿たれており、保持装置をとめる孔とみられる。この楯の寸法・文様・彩色は、延喜隼人司式に記載のある隼人の威儀用の楯と合致している。上端の小孔は馬髪を編著するためのものであろう。裏面に文字・絵画の墨書・線刻をもつものがある。なお、縱に二枚に割れたものを横桟を打ちつけて再使用したらしい、裏面には桟をとめる溝がえぐつてある。この地域の下層には弥生式時代の集落跡があつた。検出された住居跡は18個所、他に数条の溝や壇棺を埋葬した土壙二個所などがある。

第15次調査は第14次調査地域北方の6ADF区で行ない、西面南門とそれに連なる大垣および建物2棟と柵1列を発見した。西面南門は西半部が現在の道路下になり調査不能だつたが、調査した東半部では基壇は削平されており、わずかに地下に掘り込んだ基礎地固めが残存していた。その範囲は南北約32mで、大垣が門の中央にとりつくと仮定すると東西はほど14mとなる。建物は2時期にわたる各1棟で、いずれも門の北約15mの東西柵の北側にあつた。なお、この地区の北半は中世の秋篠川の氾濫で破壊されていた。

(本村豪章・鈴木充)